

# 脱落現象と構文化

前田 満

## 1. はじめに

本発表では、英語に見られる様々な脱落現象にふれ、要素の脱落(dropping)が構文化の付随現象だと主張した。脱落は省略(ellipsis)と本質的に異なる現象だと考えるのが本発表の立場である。省略と異なり、脱落は欠落部の内容がコンテキストから特定不可能でも生じうる。これは脱落において欠落部の解釈が構文内で自動的に復元されるからである。これを「復元可能性の自己充足」と呼ぶ。また、要素が脱落は文解釈に目立った影響を与えない。これを「解釈保存特性」と呼ぶ。本発表の目的はこれら脱落の2つの特性を構文化の観点から説明することである。

## 2. 脱落現象とその特性

英語では、名詞、前置詞、否定辞などの脱落が知られている(前田(2018))。それぞれの例を(1a-c)にあげた。

- (1a) a. gold 「金メダル」 < gold medal (N 脱落)  
b. I'd better go (in) the other way. (P 脱落)  
c. Like I care about that. (NEG 脱落)  
d. It's *not* like I care about that.

(1a)や(1b)については比較的良好に知られているので、ここでは(1c)にあげた否定辞の脱落(NEG 脱落)のみをとり上げる。これは否定辞を含む特定の構文において、目立った意味の変化なしに否定辞が脱落する現象を指す。(1c)は一見したところ肯定文に見えるが、およそ「知らないわけじゃあるまいし」といった否定文の解釈をもつ。これは(1c)が否定文(1d)の短縮形であり、しかも‘it's not’の欠落が文解釈の変化につながらないためだと考えられる。これは脱落現象の特徴となる解釈保存特性のためである。

## 3. 脱落現象と構文化

脱落現象をめぐる主な疑問は次の2点である。(i)なぜ脱落はきまった表現でしか見られないのか、そして(ii)なぜ脱落は解釈の変化を引き起こさないのか。まず、(i)の問題について、脱落の可否には規則性が見られず、個々の表現の特異性(idiosyncrasy)だと考えられる(前田(2018))。しかも脱落の可否は表現の使用頻度と深い関係があると考えられる十分な証拠がある。Bybee(2010)によると、構文発達(構文化)の認知的基盤はチャンク形成(chunking)である。チャンク形成とは、使用頻度の高い語列をチャンク(chunk)、すなわちひと塊のユニットとして処理する認知操作をいう。要するに、この構文化のモデルでは、ターゲットの反復使用が構文化の発端であり、かつその推進剤となる(前田(2016))。したがって、脱落と表現の使用頻度の間の密接な関係は、前者が構文化の付随現象であることを示唆する。

(i)の問題の解決の鍵となるのは、「ゲシュタルト化」と呼ぶ意味変化である。チャンク形成の働きのため、構文はしだいに合成性を失っていくが、これはゲシュタルト化の働きによるものと考えられる。ゲシュタルト化には個々の構成要素の意味を「全体的意味」へとまとめあげ、構文的意味を創出する働きがある。本発表では、このプロセスを、構文フレームが構成要素の意味を「吸収」し、それらが構文フレーム上で「混交」という形でモデル化する(前田(2016))。一方、ゲシュタルト化の進行につれて、構文を構成するそれぞれの語はいわば「意味の抜け殻」となり、正常な語としての機能を失う。このプロセスで生ずる要素を「偽記号」と呼ぶ。

まず、脱落を許す語列はどれも慣習化が顕著であり、この事実は、これらがすでに構文化を経ていることの証である。要するに、脱落の可否と構文化の間には密接な関係があると考えられる(前田(2018))。例えば、(2a)の on が脱落するのに対して、(2b)の on は脱落しない。この表現ごとの脱落の可否は原理的には説明しがたい。

- (2) a. You are taking me to the movie (on) Friday? (P 脱落)  
b. Don't put it \*(on) my desk.

ただし脱落が構文化の付随現象だとすれば、表現ごとのふるまいの違いはむしろ予測可能となる。というのも、構文化は同じ語を含むすべての表現に一律に生ずるわけではなく、むしろ構文を構成する語どうしの共起頻度の高さに強く左右されるからである。例えば、曜日の on の場合、それと共起する相手は、Sunday から Saturday ま

でのたった 7 つしかない。そのため、曜日の on と補部 NP との共起頻度はずばぬけて高くなる。一方、場所の ‘on+NP’ 句では、補部 NP のタイプ数は実質的に無限大といえる。結果として、場所の ‘on+NP’ 句では、前置詞と補部 NP の共起頻度が格段に低くなり、構文化はずっと生じにくくなる。場所の ‘on+NP’ 句で on の脱落が生じないのはそのためだと思われる。以上のように、構文化という観点から眺めると、脱落の分布が 1 部の表現に偏る理由が明快に説明できる(前田(2018, 2019))。

次に、(ii)の問題、すなわち、なぜ脱落は解釈の変化を引き起こさないのかという問題に移る。上述のように、ゲシュタルト化が生ずると、個々の語が意味成分の大半を失い、偽記号となる。偽記号の有無は文機能には大きな影響を及ぼさない。したがって、脱落を「偽記号の欠落」だと考えれば、脱落が文解釈の変化につながらない理由は自明となる。しかも「復元」すべき意味成分があらかじめ構文的意味の中に組み込まれているので、この点からも、文解釈に支障が生じない。以上のように、脱落現象を特徴づける「解釈保存特性」および「復元可能性の自己充足」もやはりゲシュタルト化によって説明できる(前田(2018))。

#### 4. 脱落のモデル

以上の点を念頭において再び (1c)に戻る。(1c)の母体構文 (1d)は、聞き手の期待に反することを述べて、サーカスティックな態度を表すという発話行為に用いられ、口語英語では固定度の高い常套句としてかなり頻繁に用いられる。使用頻度の高い語列にはチャンク形成が作用し、その働きのために語列はチャンクへと変化し、ひとまとめに処理されるようになる。この処理方法が定着するにつれて、構文化が進行し、(1c)は最終的に 1 つの構文へと発達する。これと並行して、語列はゲシュタルト化の働きにより合成性を失っていく。またその結果、(1d)を構成する語の意味が構文フレームに「吸収」され、さらに構文フレーム上で「混交」することによって、構文的意味が形成される。一方、not を含む構文の固定要素は意味成分を失って「偽記号」へと変化し、この時点で not は脱落可能となる。ただし注意してほしいのは、偽記号がすべて脱落するわけではないという点である。以上に説明した脱落のメカニズムは脱落の必要条件にあたり、それだけでは十分条件にはならない。脱落の十分条件となるのは談話上の動機である(前田(2018))。脱落のもっともありふれた動機はおそらく発話労力の軽減であろうが、ケースによっては動機の解明は至難の業となることもある。ともあれ、not の脱落を可能とするメカニズムとはチャンク形成、すなわち構文化であり、説明の鍵となるのはゲシュタルト化である。

#### 5. まとめと今後の展開

本発表では、これまで十分に説明がなされていなかった省略現象に、近年開発された構文化のモデルを用いてアプローチした。それによると、脱落は省略と異なり、構文化に伴って生ずる言語変化である。すなわち、構文化のプロセスでは、ゲシュタルト化の副産物として偽記号が生成されるが、脱落を偽記号の欠落およびその慣習化と考えるならば、「復元可能性の自己充足」および「解釈保存特性」といった脱落の特性を特別な想定なしに説明できる。

以上のように、本発表の提案は(1)にあげた脱落現象の説明モデルとして有効だと思われるが、同時にそれは脱落部を含む構文の発達の説明に広く応用可能だと思われる。構文フレーム内に脱落部をもつ構文を「虫食い構文」と呼ぶが、英語だけを見ても数多くの例が見られる。例えば、半動名詞(half-gerund)と呼ばれる(3a)の構文は、伝統的に in の脱落により(3b)の構文から分岐したものとみられている。

(3) a. And now he should have no trouble deciding between us.

b. And now he should have no trouble *in* deciding between us.

その根拠となるのは、両構文の解釈の類似性および分布の重なりである。実際、前田(2019)で示したように、(3b)の構文から(3a)の構文が分岐した可能性は十分にある。そうだとすると、半動名詞の発達は本発表で提案したメカニズムを通じて in が脱落したために生じたという説明が可能となる。同様の説明は、脱落部を含む‘as if ...’や‘how come ...?’といった他の構文にも応用できる潜在性を秘めている。

#### 参考文献

Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.

前田 満 (2016) 『史的構文研究—構文発達のダイナミズム』博士論文、立正大学。

前田 満 (2018) 「gold だけでなぜ「金メダル」?—省略と意味変化—」米倉緯・中村芳久(編)『英語学が語るもの』くろしお出版, pp. 109-125.

前田 満 (2019) 「半動名詞の発達と構文化」『近代英語研究』第 35 号, pp. 59-84.